

西村卓君と私は高校と大学が同窓である。二人は共通点が多いが卒業以来、別々の道を選び35年程は会っていないかった。彼は会社を早期退職した後、中国で日本語教師をしながら、自由気ままな一人旅を楽しんでいた。5年ほど前に高校の同窓が集まって読書会（西堀会）を始めた時に、山好きや探検好きの連中が集まった。その頃、彼は中国から戻ってきて若い時期に「やり残した」バックパッキングにハマっていた。

私は大学卒業後に思うところがあつて2年あまりヒッピーまがいのバックパッカーになったが、彼はまわり道をせずに製薬業界に就職した。彼が堂々たる社会人になったのを見て羨ましい気がしたが、彼も私が好き放題に自由なバガボンドになったのが羨ましくて、今になって青春時代を取り戻しているのだと笑っていた。

さて、読書会で旅の醍醐味は放浪だと二人の意見が一致して、いつか一緒に旅に行こうということになった。その機会は思つたより早く到来した。彼の次の放浪の旅先はミャンマーであつた。ミャンマーといえば、私はレアメタル鉱山の開発で定期的に訪問していたので好都合であつた。出張のついでに現地で合流することになった。合流地点はミャンマーの古都であるバガンにした。バガンを選んだ理由は私の姉が今年1月に亡くなったために、ここでささやかな法要をしたいと思つたからだ。

バガンとはカンボジアのアンコールワツ

AROUND THE WORLD

山師の手帳 第30回 中村繁夫

定年後のバックパッカーのススめ



ト、インドネシアのポロブドゥールに並ぶ世界三大仏跡である。彼は中国の雲南省經由でシアン州に行き古都バガンにはひと足先に入っていた。私はシンガポールで一仕事を終えてからバガンを目指した。

バガンに着いてからは、タクシーは使わず電動バイクで全てのパゴダに行くことにした。長い間、お互い別の道を歩んできたが、毎日学生時代に戻って徹夜であらゆる議論を続けるとお互いの距離感が更に近づいた気になった。

徹夜の議論の論点は世代論であつた。彼は米系製薬業界の再編のなかで合併に次ぐ合併を経験した。自分より若い連中は親会社の出身だというだけで幅を利かせ、リストラ候補の団塊世代を疎ましく思っているようだった。西村君はMR（医薬情報担当者）の仕事をしてきたが、金儲け主義に走る親会社の方針には疑問を感じていたようだ。

製薬業は人命を救う仕事であるから金儲けの前に人道的配慮を最優先すべきだという彼の意見はかき消された。

結局、若手の主流派との意見が合わず辞表を叩きつけたのである。若手の連中にいくら昔の苦労を話しても理解されない団塊世代の敗北であつた。

そんな時に中国で日本語教師が求められていることを知り、中国語は出来なかつた

が、中国での日本語教師に転職したのだ。彼が馴染みのない語学に悪戦苦闘したことは想像に難くないが、中国の若手の世代との交流は楽しかったと言っていた。

それからは時間さえあれば、中国のみならず東南アジアを中心にバックパッカーをして一人旅を繰り返した。一方、私は若い時の放浪の経験が役に立って世界を駆け巡る商社マンの道に入った。暇な時間さえあれば私は若い世代との議論を楽しむタイプだ。

西村君と私との違いは早く放浪をしたのか、遅くしたのかだけの違いである。ただし、「今を生きる」視点は同じだ。つまり、40年経っても我々は若い頃と大して変わっていないことに気づいたのである。

一緒に仏跡を回って、もう一つ奇遇が判明した。私は姉の四十九日の喪が明けた次の日にミャンマーに來たが、彼の実姉も同じ月に亡くなったと聞いた。彼のお姉さんは69歳の若さで逝ったが、私の姉と年齢まで同じだった。不思議な偶然だが、道は違つてもよく似た運命を辿ってきたような気になった。



〔なかむら・しげお〕1947年生まれ。レアメタル専門商社・アドバンス・マテリアルジャパン（AMJ）社長。新著に『レアメタルハンター・中村繁夫のあなたの仕事を成功に導く「山師の兵法A to Z」』（ウェッジ）。